

千葉県八千代市

高津館跡 b 地点・本郷台遺跡

発掘調査報告書

2004



八千代市教育委員会




凡 例

1. 本書は、八千代市教育委員会が平成12・13・14年度に実施した高津館跡b地点及び本郷台遺跡の発掘調査の報告書である。
2. 調査遺跡の所在地、調査期間、調査面積、調査原因、調査担当は下記のとおりでである。

遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	調査原因	調査担当
たかつ 高津館跡b地点	八千代市高津字中村547-2他	平成13年3月6日 ～ 平成13年3月12日	確認調査 上層 136㎡/1,207.72㎡ 下層 6.4㎡/1,207.72㎡	宅地造成	森 竜哉
ほんごうだい 本郷台遺跡	八千代市委橋字サゴネ670他	平成14年3月7日 ～ 平成14年3月26日 ～ 平成14年7月1日 ～ 平成14年8月8日	確認調査 394㎡/5,100㎡ ----- 本調査 上層 200㎡ 下層 6㎡	土砂採取 農業基盤整備	常松成人 ----- 伊藤弘一

3. 本郷台遺跡の確認調査は、八千代市教育委員会が市内遺跡発掘調査事業として、国及び県の補助金を受けて実施した。高津館跡b地点の確認調査及び本郷台遺跡の本調査は、八千代市教育委員会が不特定遺跡発掘調査事業として、県の補助金を受けて実施した。
4. 整理作業及び報告書作成作業は、高津館跡b地点を武藤健一、本郷台遺跡を伊藤弘一が担当し、森竜哉・常松成人の協力を得て平成15年10月20日から平成16年3月26日までの期間実施した。
5. 本書の執筆及び編集は、武藤健一がⅠを、伊藤弘一がⅡを行った。
6. 本書の挿図及び写真図版の作成は、細川麻里・山下千代子・立松紀代美・野中則子・小林孝彰・伊藤弘一・武藤健一が行った。
7. 本書の挿図において使用した地図は以下の通りである。いずれの図も一部改変・合成して使用している。
 - 第1図 国土地理院発行 1/50,000地形図「佐倉」（平成10年発行）
 - 第2図 八千代市発行 1/2,500 八千代都市計画基本図No.18・23（平成7年発行）
 - 第4図 八千代市発行 1/2,500 八千代都市計画基本図No.9（平成7年発行）
8. 本書の遺構実測図における用例は以下の通りである。
 - (1)遺構実測図中で使用した破線は、推定復元線を示している。
 - (2)遺構実測図中のスクリーントーンの表示は以下の通りである。

	火床		カマド袖
---	----	---	------
9. 本書の遺物実測図中のスクリーントーンの表示は以下の通りである。

	須恵器		赤彩		繊維を含む土器
---	-----	---	----	---	---------
10. 本書の遺物写真における用例は以下の通りである。
 - (1)写真図版中における遺物番号は、本文中における遺物番号と一致している。
 - (2)写真図版中の遺物写真の縮尺は、概ね遺物実測図と同じである。
11. 出土した遺物・写真・図面等の調査資料は、八千代市教育委員会が保管している。
12. 発掘調査から本書の刊行に至るまで、下記の諸機関・諸氏からご指導、ご協力をいただいた。記して感謝する次第である。（敬称略・順不同）

千葉県教育庁教育振興部文化課 財団法人千葉県文化財センター 宗教法人安養院
小笠原永隆 加藤元康 川口貴明 新田浩三 大工原豊 村田一男 吉野健一 渡辺修一

目 次

凡 例

目 次

挿図目次

表目次

写真図版目次

I 高津館跡 b 地点	
1. 調査に至る経緯	2
2. 遺跡の立地と環境	2
3. 調査の方法と経過	3
4. 調査の概要	3
5. 調査のまとめ	3
II 本郷台遺跡	4
1. 調査に至る経緯	4
2. 遺跡の立地と環境	5
3. 調査の方法と経過	5
4. 調査の概要	6
5. 調査のまとめ	20

写真図版

報告書抄録

挿 図 目 次

第1図 調査遺跡位置図	1
第2図 高津館跡位置図	2
第3図 高津館跡 b 地点トレンチ配置図	3
第4図 本郷台遺跡位置図	4
第5図 本郷台遺跡確認調査トレンチ配置図	5
第6図 本郷台遺跡本調査遺構配置図・4区東壁土層断面図	6
第7図 本郷台遺跡01～06P 遺構平面図	8
第8図 本郷台遺跡07～10P 遺構平面図	9
第9図 本郷台遺跡01D 遺構平面図	10
第10図 本郷台遺跡01D カマド平面図	10
第11図 本郷台遺跡01D 出土遺物	10
第12図 本郷台遺跡遺構外出土遺物(縄文土器) 1	14
第13図 本郷台遺跡遺構外出土遺物(縄文土器) 2	16
第14図 本郷台遺跡遺構外出土遺物(縄文土器) 3	17

第15図	本郷台遺跡遺構外出土遺物(縄文土器)4	18
第16図	本郷台遺跡遺構外出土遺物(石器)1	18
第17図	本郷台遺跡遺構外出土遺物(石器)2	19
第18図	本郷台遺跡遺構外出土遺物(須恵器・土師器)	20

表 目 次

第1表	本郷台遺跡01D出土遺物観察表	10
第2表	本郷台遺跡遺構外出土遺物(縄文土器)観察表	13
第3表	本郷台遺跡遺構外出土遺物(石器)観察表	19
第4表	本郷台遺跡遺構外出土遺物(須恵器・土師器)観察表	20

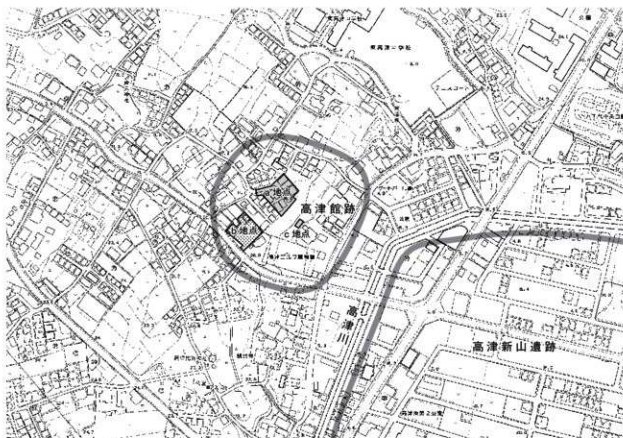
写 真 図 版 目 次

図版 1	(1) 高津館跡 b 地点調査前状況 (2) 高津館跡 b 地点調査状況 (3) 高津館跡 b 地点 3 T 完掘状況 (4) 高津館跡 b 地点 4 T 完掘状況 (5) 本郷台遺跡遠景 (6) 本郷台遺跡調査前状況 (7) 本郷台遺跡調査前状況 (8) 本郷台遺跡 4 区東壁土層断面	図版 3	(1) 本郷台遺跡05 P 完掘状況 (2) 本郷台遺跡06 P 完掘状況 (3) 本郷台遺跡07 P 完掘状況 (4) 本郷台遺跡08 P 完掘状況 (5) 本郷台遺跡09 P 完掘状況 (6) 本郷台遺跡10 P 完掘状況 (7) 本郷台遺跡35 T 遺物出土状況 (8) 本郷台遺跡調査風景
図版 2	(1) 本郷台遺跡01D土層断面 (2) 本郷台遺跡01D完掘状況 (3) 本郷台遺跡01D カマド完掘状況 (4) 本郷台遺跡01D カマド掘り方完掘状況 (5) 本郷台遺跡01 P 完掘状況 (6) 本郷台遺跡02 P 完掘状況 (7) 本郷台遺跡03 P 完掘状況 (8) 本郷台遺跡04 P 完掘状況	図版 4	(1) 本郷台遺跡01D出土遺物 (2) 本郷台遺跡遺構外出土遺物(縄文土器)1
		図版 5	(1) 本郷台遺跡遺構外出土遺物(縄文土器)2
		図版 6	(1) 本郷台遺跡遺構外出土遺物(縄文土器)3 (2) 本郷台遺跡遺構外出土遺物(石器)
		図版 7	(1) 本郷台遺跡遺構外出土遺物(須恵器・土師器)



第1図 調査遺跡位置図 (S=1:50,000)

I 高津館跡 b 地点



第2図 高津館跡位置図 (S=1:5,000)

1. 調査に至る経緯

平成13年2月2日、大東建設株式会社より八千代市高津字中村547-2他34-1の1,207.72㎡について宅地造成のための「埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて」の照会が提出された。これを受け八千代市教育委員会が現地踏査を行ったところ、現況は荒蕪地で盛土等の地形の改変が行われていたため、遺物の散布状況を観察できる地点はなかった。しかし、照会地は周知の城館跡の範囲内であり、近接して土塁と堀が確認できることから、城館跡にかかわる遺構が検出される可能性が高いと考えられた。このため照会地全域について確認調査が必要と判断し、2月13日その旨回答した。その後、この回答に沿って大東建設株式会社と協議した結果、2月16日文化財保護法第57条の2第1項の規定による土木工事のための発掘届が提出され、準備が整った3月6日に八千代市教育委員会が調査を開始した。

2. 遺跡の立地と環境

高津館跡は、八千代市南西部、高津川を東に臨む台地上縁辺部から斜面部にかけて立地している。標高は約15～21mである。高津館跡には現在でも「二重堀」と呼ばれる堀と土塁が遺存しており、中世武士の居館跡として周知されている。また、高津館跡とその周辺には平安時代の貴族藤原時平の娘である高津姫が都を離れて移り住んだという伝説が残されている(註1)。

高津館跡では昭和49年度に八千代市中世城館址調査団によって測量調査が実施され(註2)、その後今回の調査を除いて現在までに2地点の発掘調査が実施されている。a地点は台地上縁辺部に位置している。昭和56年度に八千代市教育委員会によって調査が実施され、土塁と堀の一部が調査されている(註3)。c地点は台地斜面部に位置している。平成13年度に八千代市教育委員会によって調査が実施され、トレンチの壁面において地業遺構と

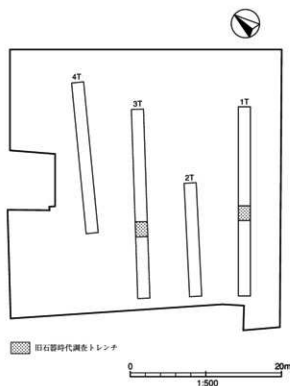
思われる人為的堆積が確認されたものの、明確な遺構は検出されなかった(註4)。

今回の調査区はb地点である。b地点はa地点の南西約40mの台地上縁辺部に位置している。標高は約21m前後である。b地点の旧地形は本来東へ傾斜する緩斜面であったと思われるが、現状では盛土されているため平坦となっている。

3. 調査の方法と経過

調査は、調査区の形状に合わせて任意に幅1.6mのトレンチを4本設定して実施した。状況に応じて適宜トレンチの延長を行いながら、136㎡について表土除去・検出作業を行い、遺構の捕捉に努めた。また、旧石器時代調査トレンチを2箇所設定し、掘り下げを行った。

調査期間は平成13年3月6～12日である。6日器材搬入、トレンチ設定、7日重機によるトレンチ表土除去作業、8日遺構検出作業、8・9日人力による旧石器時代調査トレンチ掘り下げ作業、9日トレンチ土層断面実測・撮影等記録作業、器材撤収、12日重機によるトレンチ埋め戻し作業により調査を終了した。



第3図 高津館跡b地点トレンチ配置図

4. 調査の概要

重機によるトレンチ掘削の結果、調査区は旧地表からソフトローム層下位位あるいはハードローム層上位まで削土した後、廃土が盛土されていることが確認された。部分的に2m以上盛土されているところがあったものの、概ね0.3～1.0mの厚さで盛土されていた。

調査の結果、遺構・遺物は検出されなかった。

5. 調査のまとめ

今回の調査では、遺構・遺物を検出することができなかった。当初高津館跡の範囲をとらえることができるものと期待したが、今回の調査区は旧地表をローム層まで削土後、廃土を盛土するという大きな地形の変更が行われたため、やむを得ない結果であったと考えている。

高津館跡は今回の調査を含めてこれまでに3地点において発掘調査が実施されている。また、高津川を挟んで東側に位置する高津新山遺跡では、地下式坑が数基検出されており、高津館跡に関連すると思われる中世の遺構群が展開していることが確認されている(註5)。しかしながら高津館跡については未だその性格が明らかになっていない。今後高津館跡及び近隣地の発掘調査による中世遺構の資料の増加を期待したい。

(註1) 八千代市中世城館址調査団・八千代市教育委員会 1976 『八千代市中世城館址調査報告』

(註2) 註1と同じ

(註3) 八千代市史編さん委員会 1991 『八千代市の歴史 資料編 原始・古代・中世』 八千代市

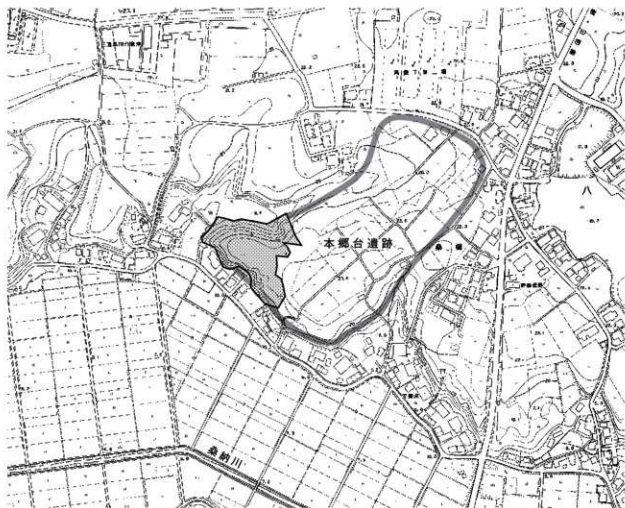
(註4) 八千代市教育委員会 2003 『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成14年度』

(註5) 八千代市教育委員会 1982 『千葉県八千代市高津新山遺跡Ⅰ—昭和56年度確認調査の概要—』

八千代市教育委員会 1983 『千葉県八千代市高津新山遺跡Ⅱ—昭和57年度確認調査の概要—』

八千代市教育委員会 1984 『千葉県八千代市高津新山遺跡Ⅲ—昭和58年度確認調査の概要—』

II 本郷台遺跡



第4図 本郷台遺跡位置図 (S=1:5,000)

1. 調査に至る経緯

平成14年1月28日、白井良夫氏より八千代市桑橋字サゴテ670他の5,777㎡について土砂採取及び農業基盤整備のための「埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて」の照会が提出された。これを受け八千代市教育委員会で現地踏査を行ったところ、現況は山林及び荒蕪地で、山林においては遺物の散布状況を観察できる地点はなかった。しかし、台地上の荒蕪地では削土等により地形が改変された状態であったものの、遺物の散布を確認することができた。そのため、照会地内の台地部については周知の遺跡の範囲内であり、遺物の散布が確認できることから、遺構が検出される可能性が高いと考えられた。このため照会地の台地部5,100㎡についてのみ確認調査が必要と判断し、2月5日その旨回答した。その後、この回答に沿って白井良夫氏と協議した結果、文化財保護法第57条の2第1項の規定による土木工事のための発掘届が提出され、準備が整った段階で八千代市教育委員会が確認調査を開始した(註1)。

確認調査は、平成14年3月7～26日までの期間実施された。調査の結果、縄文時代の炉穴・土坑、古墳時代後期の住居跡等の遺構を検出した。その後その結果に基づいて八千代市教育委員会と白井良夫氏の間で再度協議を重ねた結果、確認調査面積5,100㎡のうち遺構が検出された200㎡の範囲について本調査を実施することとなった。本調査は、平成14年7月1日～8月8日までの期間八千代市教育委員会により実施された。

(註1) 八千代市教育委員会 2003 『千葉県八千代市内遺跡発掘調査報告書 平成14年度』

2. 遺跡の立地と環境

本郷台遺跡は、八千代市北西部の桑橋に位置する。印旛沼の西端に注ぐ新川の支流、桑納川左岸の標高21～24mの舌状台地上に立地する。この台地は、桑納川から北に入り込む谷津に臨み水田面との比高差は13～16mである。台地は中央部から東側にかけ平坦であり北・西・南は急な斜面となっている。

本遺跡は平成14年に確認調査が実施され、縄文時代早期・中～後期、古墳時代後期の遺跡と促えられた。遺跡の北方には追分遺跡が展開し、平安時代竪穴住居跡、方形周溝遺構、時期不明土坑が検出された。遺物は縄文土器加曾利E式・称名寺式・堀之内式、土師器、須恵器長頸壺が出土している(註1)。また北西400mの地点では船橋市金堀台貝塚の調査が昭和33年に行われた。縄文時代竪穴住居跡1軒が検出され堀之内式・加曾利B式・曾谷式・安行式期の土器・石器などが出土し貝層の堆積が報告されている(註2)。

調査区の現状は荒蕪地と山林であった。舌状台地平坦面は重機により削平を受けその際の排土が平坦面南側で盛土となっている。削平された平坦面は荒蕪地となり、平坦面南側と斜面部が山林であった。

(註1) 八千代市教育委員会 1994 『千葉県八千代市内遺跡発掘調査報告 平成5年度』

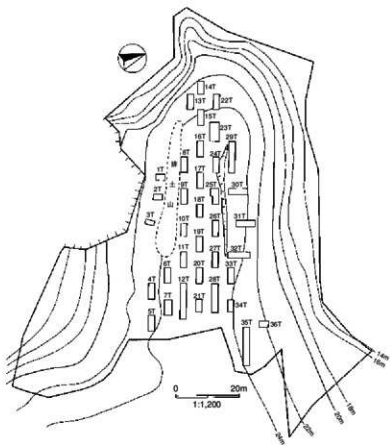
(註2) 財団法人千葉県史料研究財団 2000 『千葉県の歴史 資料編 考古1(旧石器・縄文時代)』

3. 調査の方法と経過

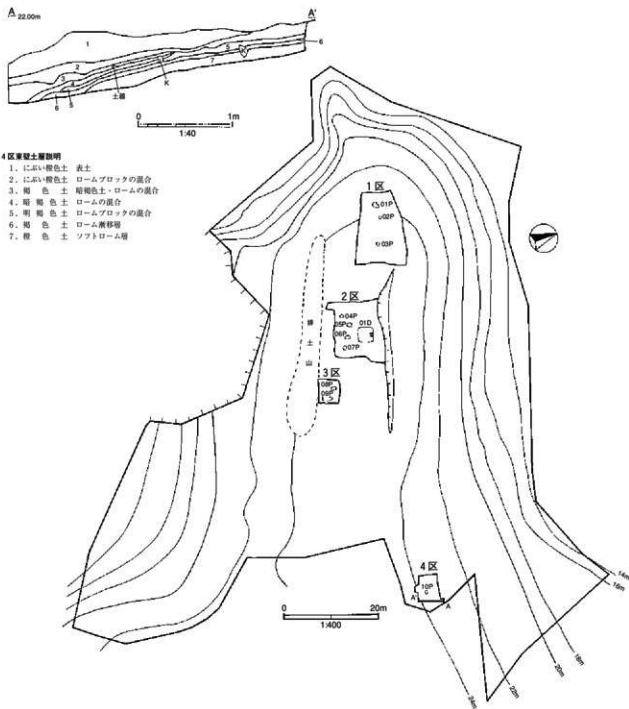
確認調査は可能な範囲内で任意にトレンチを設定し、遺構確認を行った。調査期間は平成14年3月7～26日にわたり、環境整備及びトレンチ設定後に遺構確認作業に移行した。調査結果から縄文時代炉穴2基・土坑4基、奈良時代竪穴住居跡1軒・土坑1基を確認することができた。

本調査では公共座標系及び水準は使用できず、確認調査時の仮原点を基本の杭とした。本調査範囲は確認調査によって得られた遺構の広がり考慮して決定された。面積は200㎡であり、重機により表土を除去したのち人力により遺構の検出に努めた。遺構の広がりごとに便宜上区分けを行い、西から1区とし、4区に分け調査を開始した。2区では旧石器時代確認トレンチを設け掘り下げ、4区では遺物包含層が確認できた。

調査期間は、平成14年7月1日～同年8月8日である。7月1日器材搬入、重機による表土除去作業、2日遺構検出作業から遺構調査に移行した。7月4日～8月1日遺構調査、8月2～7日旧石器時代確認トレンチ調査、8日器材撤収により調査を終了した。



第5図 本郷台遺跡確認調査トレンチ配置図



第6図 本郷台遺跡本調査遺構配置図・4区東壁土層断面図

4. 調査の概要

調査区の遺構確認は、ソフトローム上面からやや上層にて行った。また地形の改変・転圧の影響からハードローム面で遺構確認をせざる得ない遺構も存在した。

本遺跡の台地平坦面の土層堆積は以下である。1層暗褐色土(表土層)、2層暗褐色土(1層よりもしまる)、3層黄褐色土(粘性に富む)、4層黄褐色土(下部においてソフトロームが混ざる、ローム漸移層)、5層黄褐色土(ソフトローム層)、6層褐色土(ハードローム層)。

調査区4区東端では確認調査の段階から後期堀之内式を中心として縄文土器が多量に出土した。遺物包含層の

存在を考慮に入れ、平坦面から斜面にいたる土層の堆積状況を観察した。土層は表土から良好な自然堆積を示しており、その層中から土器を1点確認できた。黒色土主体に形成され斜面奥では不整合な堆積を見せる。土器は4区東壁土層断面図3層中から出土した。3層は遺物を包含する土層ではあるが、谷津方向へ堆積が傾き始める流れ込みの部分と考えられるので原位置を保つ土器とは判断できない。

今回の調査で検出された遺構は、縄文時代早期炉穴4基・早期炉1基・早期ピット2基・後期ピット1基、縄文時代ピット2基、奈良時代竪穴住居跡1軒である。出土した遺物の総点数は縄文土器1,284点、石器54点、須恵器2点、土師器11点である。縄文土器の大半は35T及び4区から出土した堀之内式であった。2区において旧石器時代トレンチを設定し掘削を行ったが、遺物の出土はなかった。遺構出土の土器で奈良時代住居跡の土師器坏以外は、遺構外出土遺物の図版の中に組み込んだ。なお、確認調査の結果は「千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成14年度」として刊行されているが、今回、確認調査時の遺物を再整理し、前回報告されたものでも掲載したほうがよいと思われた遺物に関しては再録した。

縄文時代（第7・8図）

〔01P〕

形態 不定形 規模 1.45m×1.05m×深さ0.10m 長軸方位 N-44°-E 壁 ゆるやかに立ち上がる。底面平坦で地形の傾斜に沿って傾斜している。掘り方の中心に焼土が認められた。覆土 褐色土主体の土層堆積で焼土粒が含まれている。遺物 出土しなかった。備考 遺構の上面で削平を受けている。遺構の周辺でも焼土粒が認められた。焼土、焼土粒から早期炉穴と想定する。

〔02P〕

形態 楕円形 規模 0.70m×0.50m×深さ0.20m 長軸方位 N-40°-E 壁 ほほ垂直に立ち上がる。底面平坦で地形の傾斜に沿って傾斜している。覆土 ローム主体の土層堆積で焼土粒が含まれている。遺物 出土しなかった。備考 確認調査時のトレンチで半分は失われていた。遺構の上面で削平を受けている。遺構の周辺でも焼土粒が認められた。焼土粒、焼土のひろがりから早期炉穴と想定する。

〔03P〕

形態 円形 規模 0.75m×0.65m×深さ0.10m 長軸方位 N-14°-E 壁 ゆるやかに立ち上がる。底面平坦で地形の傾斜に沿って傾斜している。掘り方の中心に焼土が認められた。覆土 褐色粘土主体の土層堆積である。遺物 出土しなかった。備考 遺構の上面で削平を受けている。早期炉と想定する。

〔04P〕

形態 楕円形 規模 0.75m×0.50m×深さ0.10m 長軸方位 N-88°-E 壁 ゆるやかに立ち上がる。底面平坦である。覆土 ローム主体の土層堆積である。遺物 出土しなかった。備考 時期・性格ともに不明である。

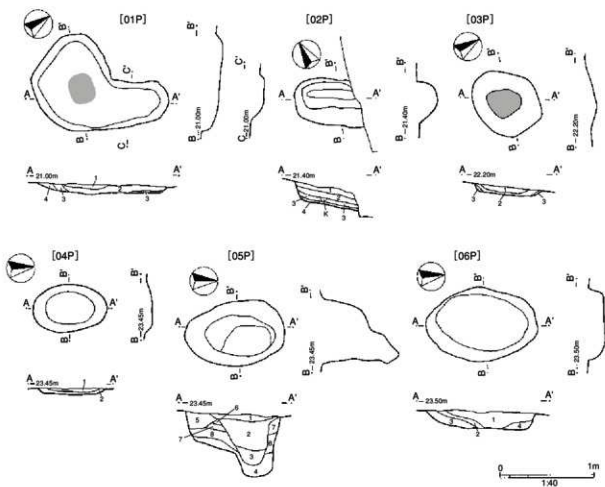
〔05P〕

形態 楕円形 規模 1.05m×0.70m×深さ0.90m 長軸方位 N-83°-W 壁 角度をもって立ち上がる。底面 北側が一段深く掘り込まれている。覆土 褐色土主体である。2・3・5層において人為的堆積である。遺物 出土しなかった。備考 時期・性格ともに不明である。

〔06P〕

形態 楕円形 規模 1.20m×0.80m×深さ0.20m 長軸方位 N-89°-W 壁 ゆるやかに立ち上がる。底面 平坦である。覆土 ローム主体の土層堆積である。遺物 土器が1点覆土から出土した。第12図7は条痕文の胴部片である。胎土に繊維を含み、条痕文が外面に斜位、内面で横位に施される。備考 時期は早期後半に位置づけられる。

〔07P〕



01P 土層説明

1. 褐色土 ローム・焼土粒を含む
2. 明褐色土 ロームブロックを含む
3. 褐色土 褐色土・ロームブロックの混合
4. 褐色土 褐色粘土の混合

02P 土層説明

1. 明褐色土 黒色土・褐色粘土の混合、焼土粒を含む
2. 褐色土 褐色粘土の混合
3. 明褐色土 褐色粘土の混合
4. 褐色土 褐色粘土の混合、焼土粒を含む

03P 土層説明

1. 明褐色土 ロームの混合、焼土粒を含む
2. 褐色土 ロームの混合、焼土粒を含む
3. 明褐色土 ローム・ロームブロックの混合

04P 土層説明

1. 褐色土 ロームブロック・黒色土の混合
2. 褐色土 褐色粘土・ロームブロックの混合

05P 土層説明

1. 褐色土 黒色土の混合
2. 明褐色土 ロームブロックの混合
3. 褐色土 褐色粘土の混合
4. 褐色土 ロームブロックの混合
5. 明褐色土 褐色土の混合
6. 褐色土 黒色土の混合
7. 明褐色土
8. 褐色土 黒色土の混合

06P 土層説明

1. 黒褐色土 褐色粘土の混合
2. 明褐色土 褐色粘土の混合
3. 黒褐色土 ロームの混合
4. 褐色土 ロームブロック・褐色粘土の混合

第7図 本郷台遺跡01～06P 遺構平面図

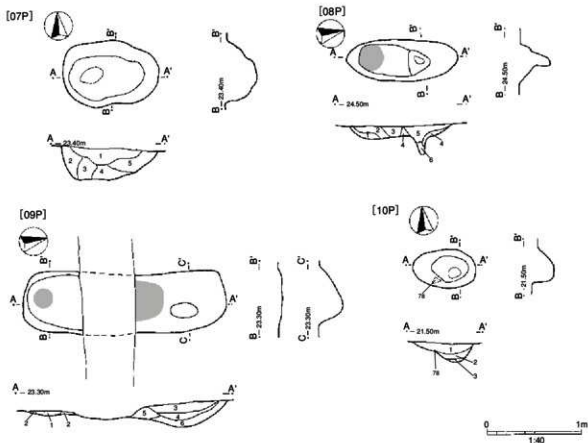
形態 楕円形 規模 1.00m×0.70m×深さ0.40m 長軸方位 N-3°-W 壁 角度をもって立ち上がる。底面 はほぼ平坦である。覆土 ローム主体の人為的堆積である。遺物 土器が1点覆土から出土した。第12図3は条痕文の胴部片である。胎土に繊維を含み、条痕文が外面で縦位、内面で斜位に施される。備考 時期は早期後半に位置づけられる。

[08P]

形態 楕円形 規模 1.17m×0.45m×深さ0.15m 長軸方位 N-79°-E 壁 ゆるやかに立ち上がる。底面 平坦で南側に焼土が認められた。一部、木の根を深く掘り下げた。覆土 黒色土主体の人為的堆積で焼土粒が含まれていた。遺物 出土しなかった。備考 焼土、焼土粒から早期炉穴と想定する。

[09P]

形態 長楕円形 規模 2.17m×0.70m×深さ0.25m 長軸方位 N-76°-E 壁 ゆるやかに立ち上がる。底



07P土層説明

1. 暗褐色土 褐色粘土の混合
2. 暗褐色土 褐色粘土の混合
3. 細暗褐色土 褐色粘土の混合
4. 褐色土
5. 暗褐色土 褐色粘土の混合

08P土層説明

1. 暗褐色土 褐色粘土・黒色土の混合、焼土粒を含む
2. 暗褐色土 褐色粘土の混合
3. 暗褐色土 ローム・褐色粘土の混合
4. 明褐色土 黒色土の混合
5. 暗赤褐色土 ロームの混合
6. 明褐色土 ロームの混合、木の屑

09P土層説明

1. 明褐色土 ロームの混合
2. 暗褐色土 ロームの混合、焼土粒を含む
3. 明褐色土 ロームの混合、焼土粒を含む
4. 暗褐色土 ロームの混合
5. 細暗褐色土 ロームの混合
6. 暗褐色土 ロームの混合

10P土層説明

1. 暗褐色土 黒色土の混合
2. 明褐色土 ロームブロックの混合
3. 暗褐色土

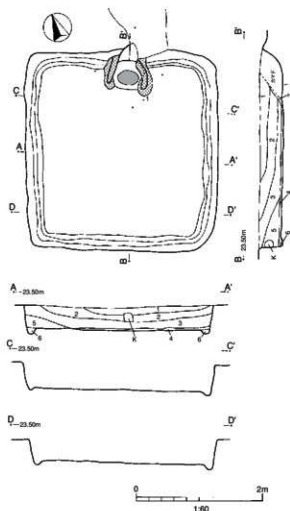
第8図 本郷台遺跡07～10P遺構平面図

面 はほぼ平坦で中央と南側に焼土が認められた。覆土 褐色土主体の人為的堆積で焼土粒が含まれていた。遺物 出土しなかった。備考 確認調査時のトレンチで一部が失われていた。焼土、焼土粒から炉穴と想定する。

[10P]

形態 楕円形 規模 0.68m×0.42m×深さ0.20m 長軸方位 N-14°-W 壁 ゆるやかに立ち上がる。底面 はほぼ平坦である。覆土 褐色土主体の土層堆積である。遺物 土器が1点底面から出土している。第15図87は縄文土器の胴部片である。外面は縄文単節LR、内面にはミガキが施される。遺構外遺物包含層の土器と接合した。備考 時期は後期堀之内式期に位置づけられる。

03Pについては掘り方の中心に焼土が認められたが、壁の立ち上がり、掘り方の範囲を明確にできず炉穴とするには慎重にならざるを得なかった。04P・05Pについては出土遺物はないが、形態、覆土の構成、他の遺構との関連から縄文時代の所産とみなせるだろう。



01D土層説明

1. 棕褐色土 少量のロームブロックの混合
2. 黒褐色土 少量のロームブロックの混合
3. 棕褐色土 少量のロームブロックの混合
4. 褐色土 多量のロームブロックの混合
5. 明褐色土 少量のロームブロックの混合
6. 明褐色土 少量の褐色砂粒の混合
7. 暗褐色土 褐色粘土・少量のロームの混合、焼土粒を含む

第9図 本郷台遺跡01D遺構平面図

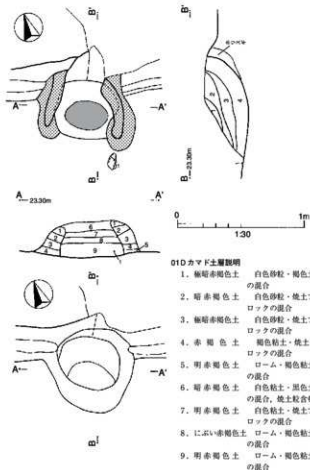
第1表 本郷台遺跡01D出土遺物観察表

遺物No.	器種	部位	計量値(㎝)		[遺存] 底径	色調	胎土	焼成	調整・文様等	出土位置	備考
			長さ	口径							
1	土師器 杯 丸底	ほぼ完形	3.5	15.3	—	暗褐色	雲母	良好	口辺外面ヨコナデ 内) ヨコヘミガキ	2区01D	

奈良時代 (第9・10・11図)

[01D]

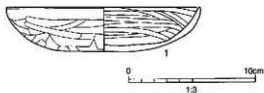
形態 方形 規模 長軸3.35m×短軸3.10m×壁高0.40m 長軸方位 N-67°-W カマド 住居跡北壁中央に位置している。右袖の一部分が確認調査時の25Tにより失われていた。袖部は白色砂粒、ローム、褐色粘土を基材にして構築されている。しまりなし。天井部は崩落していた。燃烧部の掘り込みは床面から3cm程度である。強く焼けた底面は袖部中央に位置する。煙道部は燃烧部奥で角度をもって立ち上がる。壁からの掘り込みは10cmである。掘り方は浅い皿状であった。 覆土 褐色土主体である。7層は焼土粒を含む土層が堆積していた。4層に多量のロームブロックが含まれているので人為的堆積土である可能性が高い。 周溝 幅20~25cm、深さ5cm程度である。覆土は褐色土に少量の褐色砂粒が混合する。壁面に沿って掘られている。カマド部分は袖下で止



01Dカマド土層説明

1. 棕褐色土 白色砂粒・褐色土の混合
2. 暗褐色土 白色砂粒・焼土ブロックの混合
3. 棕褐色土 白色砂粒・焼土ブロックの混合
4. 暗褐色土 褐色粘土・焼土ブロックの混合
5. 明褐色土 ローム・褐色粘土の混合
6. 暗褐色土 白色粘土・黒土の混合、焼土粒含む
7. 明褐色土 白色砂粒・焼土ブロックの混合
8. にびい暗褐色土 ローム・褐色粘土の混合
9. 明褐色土 ローム・褐色粘土の混合

第10図 本郷台遺跡01Dカマド平面図



第11図 本郷台遺跡01D出土遺物

まっている。床面 ソフトローム層中に構築され、貼床は行っていない。硬化面は認められない。人が歩いたような硬くする黒色土が点在していた。柱穴 確認できず。貯蔵穴 確認できず。遺物 覆土の中へ上層より縄文土器片が少量出土した。時期は早期条痕文系・後期加曾利B式・安行式に比定されるだろう。カマド 右袖近くの床面直上から土師器坏破片が1点出土した。口縁～底部にかけて1/4遺存しており内面を上に向けた状態であった。坏は外面にヘラケズリ、内面にヘラミガキが施されている。破片は確認調査時の25Tから出土した土師器坏と接合した。確認調査時の出土状況は、カマド右袖脇から内面を上に向け床面から若干高い部分で出土した。備考 床面直上から出土した土師器坏破片は8世紀前半の様相を示していると考えられる。

遺構外出土遺物（第12・13・14・15・16・17・18図）

本郷台遺跡での出土土器は縄文時代と奈良時代にわかる。また石器も出土しており、縄文土器に伴う時期のものであろう。

縄文時代

早期・前期・中期・後期・晩期に亘るが圧倒的な量は後期堀之内式で占められている。堀之内式を除けば他の時期の縄文土器は極めて断片的であり生活の痕跡もまたほとんど確認できない。土器は小片が多数であるが、口縁を中心に特徴のあるもの、文様の残されているものについてはできる限り図示した。

分類にあたっては大きく5群に分け、さらに各群ごとに類別を行った。各群の内容は以下の通りである。

第Ⅰ群土器 縄文時代早期の土器群

第Ⅱ群土器 縄文時代前期の土器群

第Ⅲ群土器 縄文時代中期の土器群

第Ⅳ群土器 縄文時代後期堀之内1式の土器群

第Ⅴ群土器 縄文時代後期(堀之内1式以外)・晩期の土器群

第Ⅰ群土器

早期の沈線文系及び条痕文系の土器を一括する。

第1類 田戸下層式土器（第12図1・2）

35Tから出土している。胴部の破片である。1・2は沈線の間に縦方向で連続し刺突文が施される。磨り消されたような縄文も見える。内面には非常に丁寧なミガキが加えられ器表面は平滑である。

第2類 茅山上層式土器（第12図3～8）

調査区中央から西側に分布している。

8以外は胴部の破片である。いずれも胎土に繊維を含み、条痕文が表裏に付されている。条痕の方向は乱雑で粗く、器面の整形も粗い。全体的な土器の印象は粗雑である。8は平底の底部で立ち上がりに若干の屈曲がある。内面には筋状の繊維の痕跡がみられた。

第Ⅱ群土器

前期の黒浜式土器を一括する。（第12図9・10）

9T・10Tから出土している。胎土には繊維を含む。内外面は褐色である。9は口唇上端に沈線を施している。

第Ⅲ群土器

中期の土器を一括する。

第1類 五領ヶ台式土器（第12図11～14）

5T・21T・26Tから出土している。11は沈線で区画される部分に棒状工具で交互に斜めから刺突が施されている。12は竹管状工具で垂直と斜め方向から刺突が施されている。13は地文に縄文が施され押し引きの沈線が垂下している。14は胎土に金雲母を多含している。口縁内面は明瞭な段をもつ。あるいは阿玉台式であろうか。

第2類 阿玉台式土器（第12図15）

35Tから出土している。口唇直下に明確ではない沈線がありその下に隆帯が貼り付けられている。内面は平滑である。

第Ⅳ群土器

後期の堀之内1式を一括する。

本遺跡の出土土器の大半を占め35T及び4区から出土した。口縁部・底部・胴部の破片がほとんどである。

第1類 (第12図16～29)

口縁部に沈線が1条施されるもの。円形刺突が施されるものもある。16～19は沈線により文様が区画される。22・27・28は沈線が垂下する。29は突起部沈線直下に刺突が施される。

第2類 (第12図30～35, 第13図36・37)

口縁部に沈線が2条施されるもの。地文に縄文が施されている。37は口縁部に沈線が1条施され蛇行する2本の沈線が垂下する。

第3類 (第13図38～43)

口縁部に円形押印文が施されているもの。棒状工具で正円になるものと指頭のようなもので不正円になるものがみられた。39は沈線区画を作り円形押印文を垂下させている。

第4類 (第13図44～52)

口縁部に地文として縄文が施されているもの。

第5類 (第13図53～56)

口縁部に縄文が施されていないもの。53は条線が施されている。54・55・56は無文ではあるが出土位置から本類に含めた。

第6類 (第13図57～65, 第14図66～83)

第1類から第5類のなかに含まれないものを一括した。35T・4区から出土しているので同時期のものとし本群に含めた。66～69は蛇行沈線が垂下する。70～77沈線・条線が施される。74は円形押印が施され沈線区画を区画している。78は4区10Pと遺物包含層出土の土器が接合した胴部片である。器厚は厚く内面はミガキが施され丁寧な作りである。79は櫛状工具で曲線的な条線が描出されている。82は口縁部突起で裏にも円形刺突が施されている。83は小波状口縁の深鉢である。口径と胴部最大径がほぼ同じで頸部の括れがごくわずかである。地文は縄文で波頂下に刺突が施され浅い沈線が口縁部にめぐる。また刺突から蛇行沈線が垂下し単位文様をなしている。2・3・4本の各単位で沈線が垂下する。57～65は底部である。

第Ⅴ群土器

後期(堀之内1式以外)・晩期の土器を一括する。

第1類 加曾利B式土器 (第15図84～87)

17T・25T・35T・01D覆土から出土している。口縁・胴部の破片である。84は口縁屈曲部小片である。口唇直下の沈線は強く施されているが磨り消し縄文を区画する沈線は弱い。内面は丁寧なミガキである。85は釣手土器の把手である。形態は橋状を呈し本体に近い部分であろう。また突起(橋状)部欠損の中央には小さく丸い刺突が施されている。内側中央部分には細かいミガキ調整が加えられている。本郷台遺跡の主体を占める堀之内式の土器と比べると縄文は細かく胎土は緻密である。86は口縁部に経線文が付され雲母を多く含んでいる。86・87は同一個体である。

第2類 安行1式土器 (第15図88・89)

9T・01D覆土から出土している。胴部片である。88は口縁に近い胴部であり帯縄文のあいだに突起が貼り付けられる精製土器である。89は胴部下半であり内面にナアが施される。精製土器であろう。

第3類 千綱式土器 (第15図90)

10Tから出土している。口縁部の破片である。浮線網状文が施され外面に炭化状の物質が付着している。

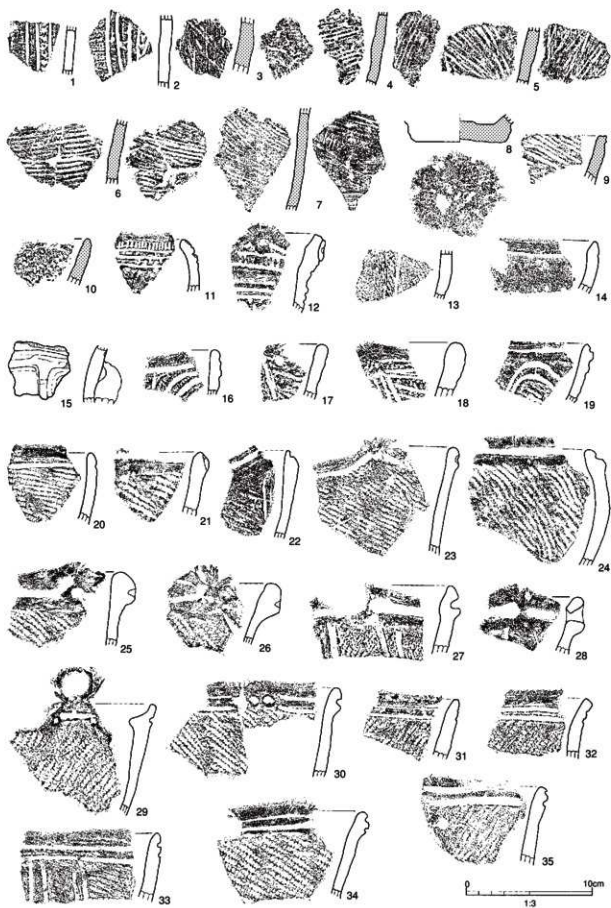
第4類 第1～3類のなかに含まれないもの(第15図91・92)

1 T・5 Tから出土している。胴部片である。91は口縁から胴部にかけてであるが胴部の破面は屈曲を示している。横方向の擦痕がある。92は斜条線が施されている。器厚は薄く胎土は緻密で焼成は良好なことから晩期に位置づけた。

93は胴部片であるが土製円盤の可能性もある。割れ口の一部分には擦ったような痕跡が見られた。本遺跡の主体をなす堀之内式に伴うものとする。

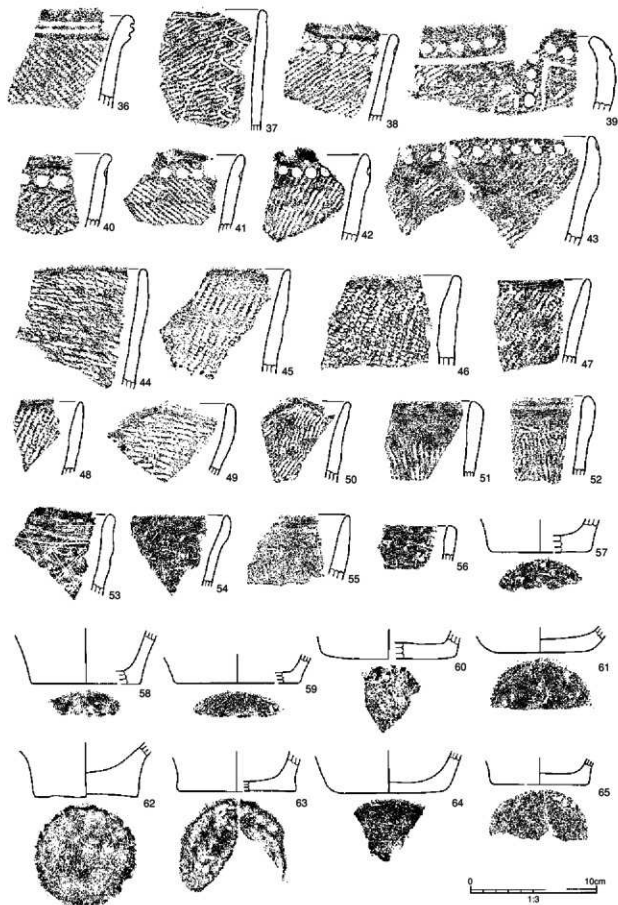
第1表 本郷台遺跡遺構外出土遺物(縄文土器)観察表

遺物No.	器種	部位	計測値(cm)		[遺存] 底径	色調	胎土	焼成	調査・文様等	出土位置	備考
			高さ	口径							
1	縄文 陶片	胴部	[3.8]	—	—	外)淡褐色 内)黒褐色	雲母	良好	沈積3本の直下 半截竹管状工具による刺突 内)ミガキ	35T	田戸下層
2	縄文 陶片	胴部	[5.8]	—	—	外)淡褐色 内)黒褐色	雲母	良好	沈積4本の直下 半截竹管状工具による刺突 内)ミガキ	35T	田戸下層
3	縄文 陶片	胴部	[4.4]	—	—	外)淡褐色 内)黒褐色	赤色スコリア 雲母	良好	織織 条痕文	07P 覆土	茅山土層
4	縄文 陶片	胴部	[5.8]	—	—	黄褐色	雲母	良好	織織 条痕文 表) 横位 裏) 浅い斜位	17T	茅山土層
5	縄文 陶片	胴部	[4.5]	—	—	淡褐色	雲母	良好	織織 条痕文 表) 斜位 裏) 斜位	表張	茅山土層
6	縄文 陶片	胴部	[5.2]	—	—	黄褐色	雲母	良好	織織 条痕文 表) 横位 裏) 横位	1区表張	茅山土層
7	縄文 陶片	胴部	[6.1]	—	—	外)黒褐色 内)淡褐色	赤色スコリア	良好	織織 条痕文 表) 横位 裏) 斜位	06P 覆土	茅山土層
8	縄文 陶片	底部	[2.2]	—	7.0	淡褐色	雲母	良好	織織 条痕文 底部外側に植物の痕跡有	1区表張	茅山土層
9	縄文 陶片	口縁部	[4.0]	—	—	褐色	雲母	普通	織文無彫シ。織織	9T	堀之内
10	縄文 陶片	口縁部	[5.7]	—	—	淡褐色	雲母	良好	縄文単節L R 織織	8T	堀之内
11	縄文 陶片?	口縁部	[4.1]	—	—	淡褐色	雲母	良好	沈積 棒状工具で交互刺突 口唇部 短沈積	5T	五塚ヶ台
12	縄文 陶片	口縁部	[6.2]	—	—	内)黄褐色	砂粒 雲母	良好	突起あり 竹管刺突文を横位に施す	21T	五塚ヶ台
13	縄文 陶片	胴部	[3.9]	—	—	外)黄褐色 内)淡褐色	砂粒	良好	縄文単節L R 浅い押し引き沈積の直下 区間に土織文	1区表張	五塚ヶ台
14	縄文 陶片	口縁部	[4.1]	—	—	淡褐色	砂粒 雲母	良好	沈積状削り出し	26T	五塚ヶ台
15	縄文 陶片	口縁部	[4.5]	—	—	淡褐色	砂粒	良好	口唇直下 浅い沈積 棒部 突起部 内)ナゲ	35T	阿玉台
16	縄文 陶片	口縁部	[3.0]	—	—	淡褐色	砂粒 雲母	良好	口唇直下1条沈積 沈積の直下	35T	堀之内1
17	縄文 陶片	口縁部	[4.3]	—	—	黄褐色	砂粒	良好	円形刺突文 沈積の直下 縄文単節L R	2区一部	堀之内1
18	縄文 陶片	突起部	[4.2]	—	—	淡褐色	赤色スコリア	良好	沈積を横位・縦位に施す 内)ミガキ	35T	堀之内1
19	縄文 陶片	口縁部	[4.6]	—	—	淡褐色	雲母 スコリア	良好	沈積を横位・縦位に施す 内)ミガキ	4区 区間内織文充填	堀之内1
20	縄文 陶片	口縁部	[5.7]	—	—	外)黒色 内)淡褐色	雲母	良好	沈積 縄文単節L R	9T	堀之内1
21	縄文 陶片	口縁部	[4.9]	—	—	外)黒褐色 内)淡褐色	雲母	普通	織織 縄文単節L R 口唇直下沈積 口縁部棒部	4区 遺物包含層	堀之内1
22	縄文 陶片	口縁部	[7.0]	—	—	淡褐色	雲母	良好	口縁部直下 口唇直下1条沈積 円形刺突 沈積の直下 縄文単節L R 内)ナゲ	4区 遺物包含層	堀之内1
23	縄文 陶片	口縁部	[8.6]	—	—	淡褐色	雲母	良好	口唇直下2条沈積 穴状口縁 口唇直下1条沈積 内)ヘラミガキ	35T	堀之内1
24	縄文 陶片?	口縁部	[9.2]	—	—	外)黄褐色 内)淡褐色	雲母	良好	口唇直下1条沈積 縄文単節L R 内)ナゲ	35T	堀之内1
25	縄文 陶片	口縁部	[5.8]	—	—	外)黒色 内)淡褐色	砂粒	良好	突起部 口唇直下1条沈積 円形刺突 縄文単節L R 内)ナゲ	35T	堀之内1
26	縄文 陶片	口縁部	[4.8]	—	—	外)淡褐色 内)褐色	砂粒 雲母	良好	突起部 縄文単節L R 棒部に円形刺突 口唇直下1条沈積 内)ミガキ	35T	堀之内1
27	縄文 陶片	口縁部	[5.3]	—	—	淡褐色	赤色スコリア	良好	突起部 円形刺突 口唇直下1条沈積 割れ口直下 縄文単節L R 内)ミガキ	35T	堀之内1
28	縄文 陶片	口縁部	[4.6]	—	—	赤色スコリア	赤色スコリア 雲母	良好	突起部 円形刺突(貫通) 口唇直下1条沈積 内)ミガキ	4区 遺物包含層	堀之内1
29	縄文 陶片	口縁部	[6.7]	—	—	外)褐色 内)褐色	雲母	良好	突起部 口唇直下に沈積 沈積下に円形刺突 縄文単節L R 内)ナゲ	4区 遺物包含層	堀之内1
30	縄文 陶片	口縁部	[7.1]	—	—	淡褐色	砂粒 雲母	良好	口唇直下2条沈積 円形刺突 縄文単節L R 内)ナゲ	2区一部	堀之内1
31	縄文 陶片	口縁部	[4.7]	—	—	淡褐色	砂粒	良好	口唇直下2条沈積 縄文L R 単節	35T	堀之内1
32	縄文 陶片	口縁部	[4.7]	—	—	淡褐色	雲母	良好	口唇直下2条沈積 縄文単節L R 内)ナゲ	4区 遺物包含層	堀之内1
33	縄文 陶片	口縁部	[5.4]	—	—	外)黒色 内)黒褐色	砂粒	良好	口唇直下沈積2条 胴部沈積文の直下 縄文単節L R 内)ミガキ	4区 遺物包含層	堀之内1
34	縄文 陶片	口縁部	[6.9]	—	—	外)黒褐色 内)淡褐色	雲母	良好	口唇直下2条沈積 縄文単節L R 内)ミガキ	4区 遺物包含層	堀之内1
35	縄文 陶片	口縁部	[6.2]	—	—	外)黒色 内)淡褐色	スコリア	良好	口唇直下沈積2条 円形刺突 縄文単節L R 内)ナゲ	4区 遺物包含層	堀之内1
36	縄文 陶片	口縁部	[7.4]	—	—	褐色	砂粒 雲母	普通	口唇直下2条沈積 円形刺突 縄文単節L R 内)ミガキ	4区 遺物包含層	堀之内1

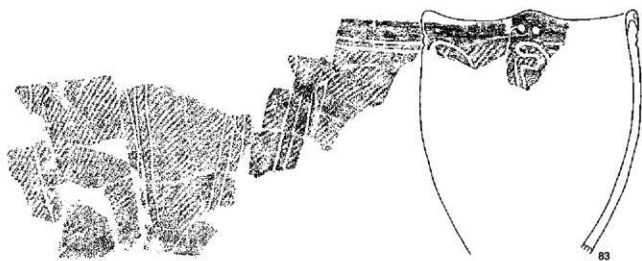
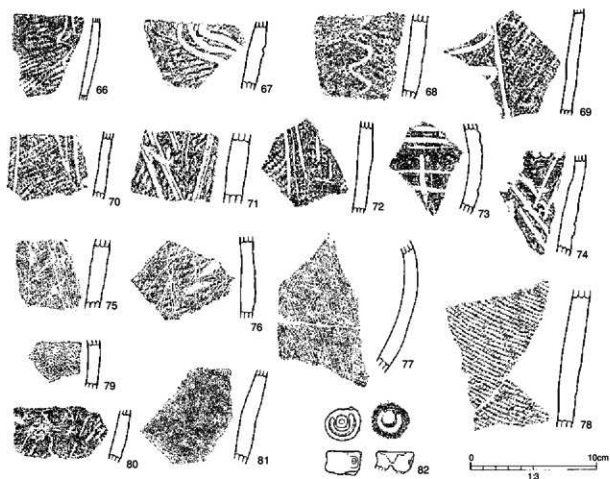


第12図 本郷台遺跡遺構外出土遺物(縄文土器) 1

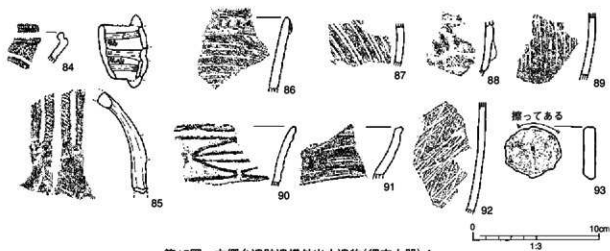
遺物No	器種	部位	計測値 (cm) [復元] [遺存]			色調	胎土	焼成	調査・文様等	出土位置	備考
			器高	口径	底径						
27	縄文 陶鉢	口縁部	[9.5]	—	—	外) 赤褐色 内) 黒色	砂粒 雲母	良好	口唇直下1条沈線 蛇行沈線直下 縄文単筋 L R 内) ミガキ	4区 遺物包含層?	堀之内1
38	縄文 陶鉢	口縁部	[6.8]	—	—	赤褐色 赤色スコリア	砂粒	良好	口唇直下部押正文 縄文単筋 L R 内) ナダ	4区 遺物包含層	堀之内1
39	縄文 陶鉢	口縁部	[6.0]	—	—	外) 赤褐色 内) 黄褐色	砂粒 雲母	良好	口唇部内部押正文 1条沈線 沈線直下による 区画内内部押正文 縄文単筋 L R	4区 遺物包含層	堀之内1
40	縄文 陶鉢	口縁部	[5.7]	—	—	赤褐色	赤色スコリア 雲母	良好	口唇部内部押正文 縄文単筋 L R 内) ミガキ	4区 遺物包含層	堀之内1
41	縄文 陶鉢	口縁部	[6.1]	—	—	赤褐色	砂粒 雲母	良好	口唇部内部押正文 縄文単筋 L R 内) ナダ	35T 堀之内1	
42	縄文 陶鉢	口縁部	[6.9]	—	—	暗褐色	砂粒 雲母	良好	口唇部内部押正文 縄文単筋 L 内) ミガキ	35T 堀之内1	
43	縄文 陶鉢	口縁部	[8.4]	—	—	外) 褐色 内) 褐色	赤色スコリア 雲母	良好	口唇部内部押正文 縄文単筋 L R 内) ナダ	35T 堀之内1	
44	縄文 陶鉢	口縁部	[9.4]	—	—	外) 赤褐色 内) 赤褐色	雲母	良好	縄文単筋 R L 内) ミガキ	4区 遺物包含層	堀之内1
45	縄文 陶鉢	口縁部	[8.2]	—	—	外) 赤褐色 内) 赤褐色	砂粒 雲母	良好	縄文単筋 L R 内) ナダ	2区一括 堀之内1	
46	縄文 陶鉢	口縁部	[7.2]	—	—	赤褐色	雲母	良好	縄文単筋 L R 内) ナダ	35T 堀之内1	
47	縄文 陶鉢	口縁部	[6.6]	—	—	赤褐色	雲母	良好	縄文単筋 L R 内) ミガキ	2区一括 堀之内1	
48	縄文 陶鉢	口縁部	[5.7]	—	—	赤褐色	赤色スコリア 雲母	良好	縄文単筋 L R	4区 遺物包含層	堀之内1
49	縄文 陶鉢	口縁部	[5.4]	—	—	外) 赤褐色 内) 赤褐色	雲母	良好	縄文単筋 R L 波状口縁部 内) ナダ	2区一括 堀之内1	
50	縄文 陶鉢	口縁部	[6.3]	—	—	外) 赤褐色	雲母	良好	波状部 縄文単筋 L R 内) ナダ	35T 堀之内1	
51	縄文 陶鉢	口縁部	[6.0]	—	—	外) 赤褐色 内) 褐色	砂粒	良好	縄文単筋 L R 内) ナダ	4区 遺物包含層	堀之内1
52	縄文 陶鉢	口縁部	[6.2]	—	—	外) 赤褐色 内) 褐色	砂粒	良好	縄文単筋 L R 内) ナダ	35T 堀之内1	
53	縄文 陶鉢?	口縁部	[6.4]	—	—	赤褐色	砂粒	良好	口縁部横位条線 斜位条線 内) ナダ	4区 遺物包含層	堀之内1
54	縄文 陶鉢?	口縁部	[5.6]	—	—	暗褐色	砂粒	良好	無紋 内) ナダ	4区 遺物包含層	堀之内1
55	縄文 陶鉢?	口縁部	[5.1]	—	—	外) 赤褐色 内) 褐色	砂粒	良好	無紋 内) ナダ	35T 堀之内1	
56	縄文 陶鉢	口縁部	[2.9]	—	—	暗褐色	砂粒	良好	無紋 内) ナダ	4区 遺物包含層	堀之内1
57	縄文 陶鉢	底部1/4	[2.6]	—	(7.4)	赤褐色	雲母	良好	無紋 外) ナダ	35T 堀之内1	
58	縄文 陶鉢	底部1/4	[4.3]	—	(8.0)	外) 赤褐色 内) 黒色	砂粒	良好	無紋	4区 遺物包含層	堀之内1
59	縄文 陶鉢	底部1/4	[2.3]	—	(10.0)	外) 赤褐色 内) 黄褐色	砂粒	良好	無紋 内) ナダ	35T 堀之内1	
60	縄文 陶鉢	底部1/5	[2.3]	—	(8.3)	赤褐色	赤色スコリア 雲母	良好	無紋	35T 堀之内1	
61	縄文 陶鉢	底部1/2	[2.1]	—	(7.8)	外) 暗褐色 内) 暗褐色	砂粒 雲母	良好	無紋	35T 堀之内1	
62	縄文 陶鉢	底部	[4.3]	—	8.0	赤褐色	砂粒 雲母	良好	無紋	9T 堀之内1	
63	縄文 陶鉢	底部2/3	[3.1]	—	(9.2)	外) 赤褐色 内) 黒色	砂粒 雲母	良好	無紋	35T 堀之内1	
64	縄文 陶鉢	底部1/4	[3.2]	—	(8.6)	赤褐色	砂粒	良好	無紋 外) ナダ	35T 堀之内1	
65	縄文 陶鉢	底部1/2	[2.1]	—	(7.8)	外) 褐色 内) 褐色	砂粒	良好	無紋 外) ココナダ 内) ヘラケグネ	4区 遺物包含層	堀之内1
66	縄文 陶鉢	胴部	[6.6]	—	—	外) 赤褐色 内) 黒色	砂粒 雲母	良好	蛇行沈線の直下 縄文単筋 L R 内) ミガキ	4区 遺物包含層	堀之内1
67	縄文 陶鉢	胴部	[5.4]	—	—	暗褐色	砂粒 雲母	良好	蛇行沈線の直下 縄文単筋 L R 内) ナダ	35T 堀之内1	
68	縄文 陶鉢	胴部	[6.6]	—	—	外) 黄褐色 内) 黄褐色	砂粒	良好	蛇行沈線の直下 縄文単筋 L R 内) ミガキ	4区 遺物包含層	堀之内1
69	縄文 陶鉢	胴部	[6.3]	—	—	灰褐色	砂粒	良好	蛇行沈線・沈線の直下 縄文単筋 L R	35T 堀之内1	
70	縄文 陶鉢	胴部	[5.1]	—	—	暗褐色	砂粒	良好	縄文単筋 L R 沈線の直下 内) ナダ	35T 堀之内1	
71	縄文 陶鉢	胴部	[5.8]	—	—	赤褐色	砂粒 雲母	良好	縄文単筋 L R 沈線の直下 内) ナダ	35T 堀之内1	
72	縄文 陶鉢	胴部	[7.2]	—	—	暗褐色	砂粒	良好	縄文単筋 L R 沈線の直下	35T 堀之内1	
73	縄文 陶鉢	胴部	[7.1]	—	—	黄褐色	砂粒 赤色スコリア	良好	沈線の横位	4区 遺物包含層	堀之内1
74	縄文 陶鉢	口縁部～ 胴部	[8.0]	—	—	外) 黒色 内) 赤褐色	砂粒	良好	口縁部内部押正文 沈線の斜位 内) ナダ	35T 堀之内1	
75	縄文 陶鉢	胴部	[5.5]	—	—	赤褐色	砂粒	良好	条線の直下	35T 堀之内1	
76	縄文 陶鉢	胴部	[6.8]	—	—	外) 赤褐色 内) 黄褐色	赤色スコリア 砂粒	良好	条線の斜位	4区 遺物包含層	堀之内1
77	縄文 陶鉢	胴部	[10.5]	—	—	暗褐色	砂粒	良好	条線の斜位 内) ミガキ	4区 遺物包含層	堀之内1
78	縄文 陶鉢	胴部	[10.9]	—	—	暗褐色	砂粒	良好	縄文単筋 L R 内) ミガキ	100 遺物包含層	堀之内1
79	縄文 陶鉢	胴部	[3.3]	—	—	赤褐色	砂粒	良好	磨状工具で曲線文を施す 内) ミガキ	31T 堀之内1	
80	縄文 陶鉢	胴部	[4.1]	—	—	黄褐色	砂粒	良好	まばらに磨赤文が施される	35T 堀之内1	
81	縄文 陶鉢	胴部	[8.3]	—	—	暗褐色	砂粒	良好	条線の斜位 若干括れる 内) ミガキ	35T 堀之内1	
82	縄文 陶鉢	突起部	—	—	—	赤褐色	雲母	良好	口縁突起部	35T 堀之内1	



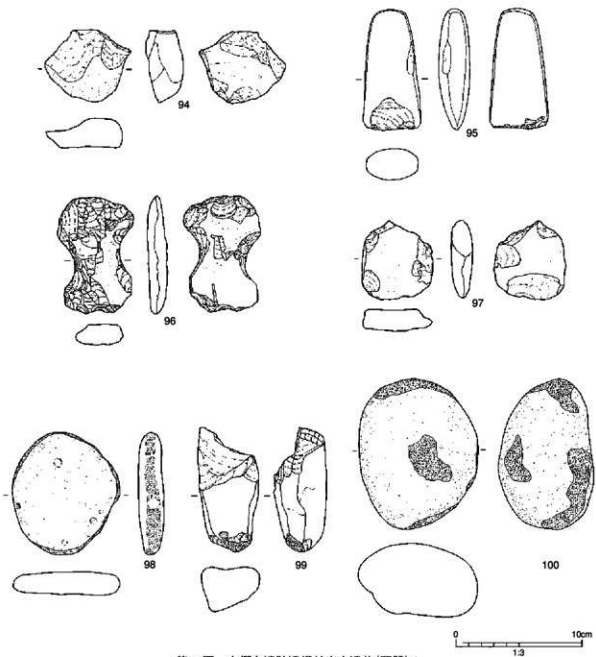
第13図 本郷台遺跡遺構外出土遺物(縄文土器) 2



第14図 本郷台遺跡遺構外出土遺物(縄文土器) 3



第15図 本郷台遺跡遺構外出土遺物(縄文土器) 4



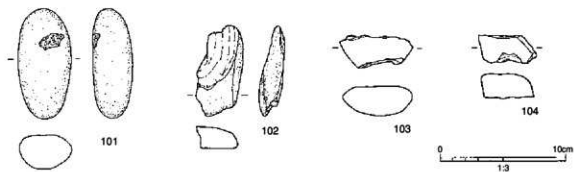
第16図 本郷台遺跡遺構外出土遺物(石器) 1

遺物No.	器種	部位	計測値(cm)			色調	胎土	焼成	調整・文様等	出土位置	備考
			計測長さ	口径	底径						
83	縄文 深鉢	口縁部~ 胴部	[23.9]	23.0	—	外) 褐色色 内) 黒色	赤色スコリア	良好 縄文中期ⅡR縄文 小沢状口縁 円形刺突 口部部化縁2条 2, 3, 4条の各単位で化縁並下 絞行波縄文並下 浅鉢か台付鉢か	35T 4区 遺物包含層	堀之内1	
84	縄文 鉢?	口縁部	[1.7]	—	—	淡褐色	良好	屈曲部 沈陥 すりけし縄文 浅鉢か台付鉢か	35T	加賀利B	
85	縄文 釣子土器	全長	[8.0]	—	—	淡褐色	良好	縄文 沈陥 突起(橋状)部の欠損 内) ミガキ 部か1.R縄文	2区01DNo6 25T	加賀利B	
86	縄文 深鉢	口縁部	[5.9]	—	—	淡褐色	良好	結核文 表縁の橋状 縄文 内) ミガキ	35T	加賀利B	
87	縄文 深鉢	胴部	[3.3]	—	—	淡褐色	良好	条線の斜位 内) ミガキ	17T	加賀利B	
88	縄文 深鉢	口縁部付近	[4.4]	—	—	淡褐色	良好	突起 隆起帯縄文	9T	安行1	
89	縄文 深鉢	胴部	[5.2]	—	—	外) 褐色色 内) 黒褐色	砂粒 赤色スコリア	良好	条線の縦位 胴部下半	01DNo土 安行1	
90	縄文 深鉢	口縁部	[4.7]	—	—	外) 褐色色 内) 褐色	砂粒	良好	浮線網状文	10T	子嗣
91	縄文 浅鉢	口縁部	[4.0]	—	—	黄褐色	良好	断面か 内) ナデ	35T	晩期後半	
92	縄文 深鉢	胴部	[6.7]	—	—	褐色	良好	浅い条線 内) ナデ	1T	晩期後半	
93	縄文 土製円盤	長軸 4.5	短軸 4.1	高さ 2.6	2.6	淡褐色	砂粒 赤色スコリア	良好 無文	21T	後期	

石器 (第16図94~100, 第17図101~104)

本遺跡では総点数54点の石器が検出された。石器は17T・25T・35T・4区から出土し表採でも得られた。遺構からの出土はなく調査範囲に各器種が散在している状況である。

94は数ヶ所の打面から剥離を試みている。石核であろうか。95は磨製石斧である。全面が良く研磨されて両刃で刃部側が開く形状をなしている。96・97は分銅形打製石斧である。96は両面に自然面を残す。調整は側縁全体に及び剥離は面的で深いものである。97は両面に大きく自然面を残す。刃部、袈に簡単な調整を施している。実測図正面右方向からの衝撃により破損している。98・99は磨石敲石である。98は扁平な円盤の表裏面に磨耗が認められる。側縁部全面にわたって敲打痕も見られる。99は全面に磨耗が認められ下部には敲打痕も見られる。100は安山岩製の敲石である。手のひらで握れる大きさであり上下端部の敲打が著しい。側縁にも敲打痕が認められる。101は敲石だろうか。全面に研磨が施される。敲打による窪みが見て取れる。102~104は小破片であり用途は不明である。103・104は研磨されている。



第17図 本郷台遺跡遺構外出土遺物(石器) 2

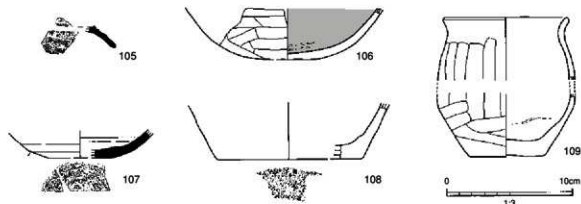
第3表 本郷台遺跡遺構外出土遺物(石器)観察表

遺物No.	器種	石材	計測値(cm)		長さ(a)	出土位置	備考	
			長さ	幅				
94	石核か	ガラス質褐色安山岩	5.7	6.7	2.2	114	表採	
95	磨製石斧	硬質砂岩	9.6	4.6	2.3	187	17T	定形式
96	打製石斧	ホルンフェルス	9.2	6.0	1.7	106	25T	分銅形
97	打製石斧	安山岩	6.2	5.6	1.7	76	35T	分銅形
98	敲石磨石	安山岩	9.7	8.5	1.9	238	4区遺物包含層	
99	敲石磨石	砂岩	9.8	4.8	3.6	205	4区遺物包含層	
100	磨石	安山岩	12.9	9.4	5.8	984	表採	
101	敲石か	安山岩	8.7	4.3	2.7	171	35T	
102	磨石	ホルンフェルス	7.2	3.2	1.7	68	1区表採	
103	磨石	砂岩	2.6	5.8	2.4	44	表採	
104	磨石	砂岩	2.2	4.6	2.0	32	1区表採	

奈良時代

1 T・4 T・36 Tから出土している。

105は須恵器口縁部の小破片である。焼成が堅緻で青灰色であり胎土は緻密である。角度の変化点に沈線がめぐらされている。口唇内側に浅い段をもつ。器形は不明であり、あるいは図と反対なのかもしれない。106は土師器の丸底坏である。底部から体部にかけての立ち上がりを見ると大ぶりな坏であるのが類推できる。内面はヘラミガキ後ナダられており赤色塗彩が施されている。107は須恵器の底部である。焼成は堅緻で青灰色であり胎土に砂粒はほとんど含まれない。109は土師器小型壺である。接合はしないものの胎土・器面の調整から同一個体と判断し図上で復元した。最大径は口縁ではなく胴部にある。



第18図 本郷台遺跡遺構外出土遺物(須恵器・土師器)

第4表 本郷台遺跡遺構外出土遺物(須恵器・土師器)観察表

遺物No.	器種	部位	計量値(m) (測定)	存在	色調	胎土	焼成	調整・文様等	出土位置	備考
105	須恵器 器形不明	口縁部	(1.2)	—	青灰色	—	堅緻	ロクロ 内外面) ナダ 趾面部沈線	1T	
106	土師器 丸底坏	体部~底部	(4.0)	—	淡褐色 砂粒 雲母	—	良好	外) ヨコヘラズリ 内) ヘラミガキ後ナダ赤色塗彩 底部外周塗色(被塗部ナ)	36T	
107	須恵器	底部~体部	(2.2)	(5.0)	青灰色	—	堅緻	ロクロ 底部切り離し不明 内) ヨコナダ 体部下端ヘラズリ 底部ヘラ記号	表振	東海系
108	土師器	底部	(6.7)	—	淡褐色	—	良好	内) ナダ	4T	
109	土師器 小型壺	口唇部~ 底部	(10.5)	10.0	黒褐色	雲母	良好	口辺部ヨコナダ 外面体部タテヘラズリ 外面胴部下端ヨコヘラズリ 内) ヨコナダ	4T	

5. 調査のまとめ

縄文時代

本遺跡では早期炉穴4基・早期炉1基・早期ピット2基・後期ピット1基・時期不明ピット2基が検出された。01P・02P・03Pは炉穴として掘り込みがそれほど深くなく斜面に沿って傾斜している。形態が楕円形で小規模である。06P・07Pからは茅山上層式の土器片が出土しており炉穴との関連性を考えたい。また樹枝状に広がる炉穴が見られないことは本遺跡の炉穴が機能していたのはごく短期間であったものと思われる。市域では茅山上層式の土器が出土している遺跡として内野南遺跡a地点がある。桑納川の支流花輪川に臨み南側が大きく開けた地点に立地している。内野南遺跡a地点では炉穴の火床部分から茅山上層式の深鉢が伏せられた状態で出土した。また茅山期の竪穴住居跡と炉穴の好例としては佐倉市飯重新畑遺跡で調査が行われている。竪穴住居跡の中に炉跡はなく炉穴が竪穴住居跡の外側に展開している。炉穴からは焼けた貝も検出された。飯重新畑遺跡の調査例は早期の炉穴と竪穴住居跡の組合せを考える上で興味深い資料として挙げられる。10Pは遺物包含層近くから検出された遺構である。ピットの底面が一段深くなり始める部分から土器が出土している。包含層は堀之内式の土器であるのでその時期に利用されていたピットと考える。

遺物としては、早期・前期・中期・後期・晩期の土器が出土しており、縄文時代全般にわたり断続的ではあるにしろ利用されていた様相が明らかとなった。現在でも舌状台地先端直下には湧水による泉がある。谷津に面す

る崖線下から縄文時代においても湧水は存在していたと推測できる。85の釣手土器の出土は市域で初めての例になる。時期は加曾利B式であり胴部はない。釣手土器は大田区大森貝塚・取手市中妻貝塚・松戸市貝の花貝塚・佐倉市吉見台遺跡・成田市小菅法華塚遺跡・君津市鹿島台遺跡などで出土例がある。

調査の結果、約1,100点の堀之内式土器が遺物包含層から出土した。堀之内式土器の出土から遺構の確認に注意したが10Pを検出するにとどまった。遺物包含層の土器は廃棄された土器であり、調査区の近辺には堅穴住居跡が存在すると推測できる。

本郷台遺跡の堀之内式土器の特徴は、地文に縄文が使われていることである。縄文はほとんどが単節LR縄文である。堀之内1式土器は既ぬい様相から新しくなるにつれ文様が集合・多葉・細密化する傾向が見て取れる。本遺跡の土器は堀之内1式の古い段階と考えられる。

石器として利用した石材は安山岩・砂岩・ホルンフェルスに分類できた。使用されていた時期は特定できないが遺物包含層出土の石器もあるため堀之内式の時期と考えたい。

本遺跡は市内における有数な遺跡といつてよい。今後本地域の縄文時代を考えるうえで欠くことのできない調査事例として記憶に留めたい。

奈良時代

本遺跡では堅穴住居跡1軒が検出されている。堅穴住居跡からの土器の出土は土師器坏1点のみであった。出土した土師器坏は口径に対し器高が低いという特色をみせる。周辺の調査例を見る限り8世紀前半の遺構はやや少なく相対的に遺物量も少ないので、本住居跡は貴重な例である。8世紀前半にはそれまでの土師器坏の形態が明瞭に変化する。丸底で口径が大きく薄手の作りで器高の浅いものが目立つようになる。印濃沼周辺の調査事例から住居跡出土の土師器丸底坏は8世紀前半とし住居跡もそれに伴う時期とした。遺構外遺物では須恵器・土師器が出土している。須恵器は周辺で該期に出土することの多い焼成が堅緻な東海産の須恵器であった。このことは奈良平安時代の遺構が展開する可能性があることを示しているだろう。

参考文献

- 岡根孝夫 1972 『貝の花貝塚』 松戸市教育委員会
桑原護はか 1974 『飯重』 佐倉市遺跡調査会
八幡一郎はか 1975 『佐倉遺跡』 船橋市教育委員会
岡崎文吾 1975 『船橋考古』第4・5号合併号 船橋市遺跡資料刊行会
鈴木正博・鈴木加津子 1981 『取手と先史文化(下)』 取手市教育委員会
清藤一順 1981 『千葉市矢作貝塚』 財団法人千葉県文化財センター
市川市川考古博物館 1982 『シンポジウム 堀之内土器資料集』
郷田良一はか 1982 『千葉東部ニュータウン10 一小金沢貝塚-』 財団法人千葉県文化財センター
岡根孝夫・鈴木正博・鈴木加津子 1983 『大森貝塚出土の安行式土器(三)』 『史誌』第19号 大田区教育委員会
史観同人・市川考古博物館 1983 『シンポジウム 房総における奈良・平安時代の土器』
田村隆はか 1985 『佐倉市タルカ作遺跡』 財団法人千葉県文化財センター
三浦和信 1986 『酒々井町伊福白輪遺跡』 財団法人千葉県文化財センター
房総歴史考古学研究会 1987 『房総における歴史時代土器の研究』
岡崎文吾はか 1987 『船橋の遺跡 一船橋市史資料(2)-』 船橋市
阿部芳郎 1988 『堀之内1式土器の構成と変遷』 『信濃』第40巻第4号 信濃史学会
藤岡孝司 1990 『八千代市堂田遺跡群の歴史時代土器』 『研究連絡誌』第30号 財団法人千葉県文化財センター
栗原薫子はか 1990 『印内台遺跡 一第7・8次調査報告書-』 船橋市遺跡調査会
堀越正行はか 1992 『堀之内貝塚資料図説』 市川考古博物館
阿部寿彦はか 1993 『高岡遺跡群Ⅲ』 財団法人印旛郡市文化財センター
岡本東三・小笠原永隆・井上賢はか 1994 『城ノ台南貝塚発掘調査報告書』 千葉大学考古学研究所
大塚依子 1994 『八千代市沖塚遺跡・上の台遺跡他』 財団法人千葉県文化財センター
長谷川厚 1995 『東国における律令制成立以前の土師器の特徴について』 『東国土器研究』第4号 東国土器研究会
鈴木圭一はか 1995 『小菅法華塚Ⅰ・Ⅱ遺跡』 財団法人印旛郡市文化財センター
三石安 1997 『平成7・8年度 鎌ヶ谷市内遺跡発掘調査報告書』 鎌ヶ谷市教育委員会

- 加納実 1998 『市原市武士道跡2』 財団法人千葉県文化財センター
- 立和名明美 1998 『千葉県市原市沢道跡・種々谷津道跡・大道道跡』 財団法人千葉県文化財センター
- 菊池健一 1998 『千葉県市戸張作道跡1』 財団法人千葉県市文化調査協会
- 岸本正人・綿貫貴 1999 「縄文時代早期遺構群の一形態」『研究連絡誌』第54号 財団法人千葉県文化財センター
- 林田利之 1999 『千葉県佐倉市古見台道跡A地点』 財団法人印旛郡市文化財センター
- 清水理史 1999 『藤崎台道跡』 財団法人船橋市文化・スポーツ公社埋蔵文化財センター
- 中村宣弘 1999 『飛の台貝塚第4次発掘調査報告書』 船橋市教育委員会
- 鳴田浩司ほか 1999 『印西市鳴神山道跡・白井谷奥道跡』 財団法人千葉県文化財センター
- 常松成人 2000 『千葉県八千代市内野南道跡a地点発掘調査報告書』 八千代市道跡調査会
- 鶴岡正昭 2001 『関東における律令体制成立期以前の土師器供膳具』『東京考古』第19号 東京考古談話会
- 石坂雅樹 2001 『千葉県船橋市印内台道跡群(20)』 財団法人船橋市文化・スポーツ公社埋蔵文化財センター
- 渋谷健司ほか 2001 『千葉県成田市川東道跡群Ⅱ 一川東船跡一』 財団法人印旛郡市文化財センター
- 白井久美子・小林清隆 2002 『縄文時代後期の大型住居と船の竪割をもつ須恵器』『研究連絡誌』第63号 財団法人千葉県文化財センター
- 田中裕ほか 2002 『千葉県鷲谷津道跡』 財団法人千葉県文化財センター
- 常松成人 2003 『千葉県八千代市浅間内道跡発掘調査報告書』 八千代市教育委員会



(1) 高津館跡 b 地点調査前状況



(2) 高津館跡 b 地点調査状況



(3) 高津館跡 b 地点 3 T 完掘状況



(4) 高津館跡 b 地点 4 T 完掘状況



(5) 本郷台遺跡遠景



(6) 本郷台遺跡調査前状況



(7) 本郷台遺跡調査前状況



(8) 本郷台遺跡 4 区東壁土層断面



(1) 本郷台遺跡01D土層断面



(2) 本郷台遺跡01D完掘状況



(3) 本郷台遺跡01Dカマド完掘状況



(4) 本郷台遺跡01Dカマド掘り方完掘状況



(5) 本郷台遺跡01P完掘状況



(6) 本郷台遺跡02P完掘状況



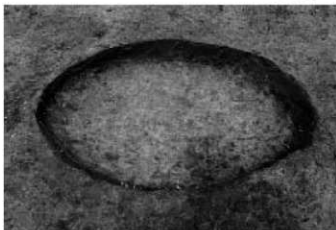
(7) 本郷台遺跡03P完掘状況



(8) 本郷台遺跡04P完掘状況



(1) 本郷台遺跡05P完掘状況



(2) 本郷台遺跡06P完掘状況



(3) 本郷台遺跡07P完掘状況



(4) 本郷台遺跡08P完掘状況



(5) 本郷台遺跡09P完掘状況



(6) 本郷台遺跡10P完掘状況



(7) 本郷台遺跡35T遺物出土状況

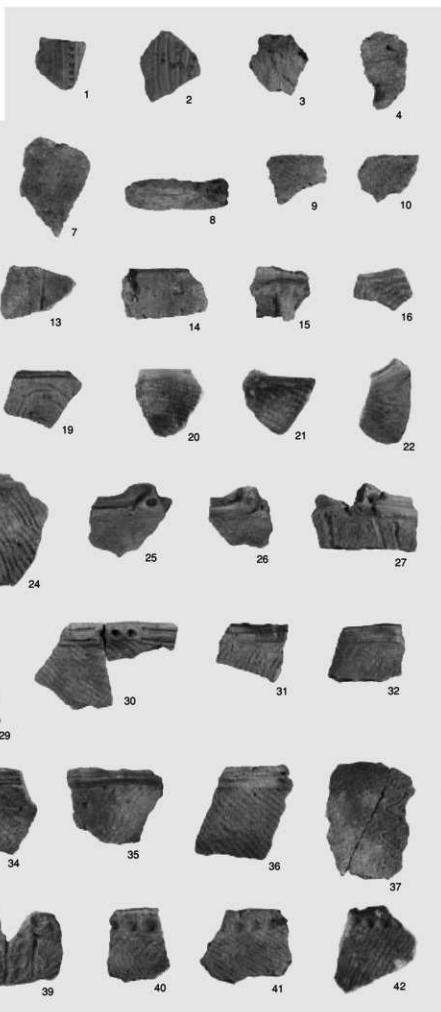


(8) 本郷台遺跡調査風景

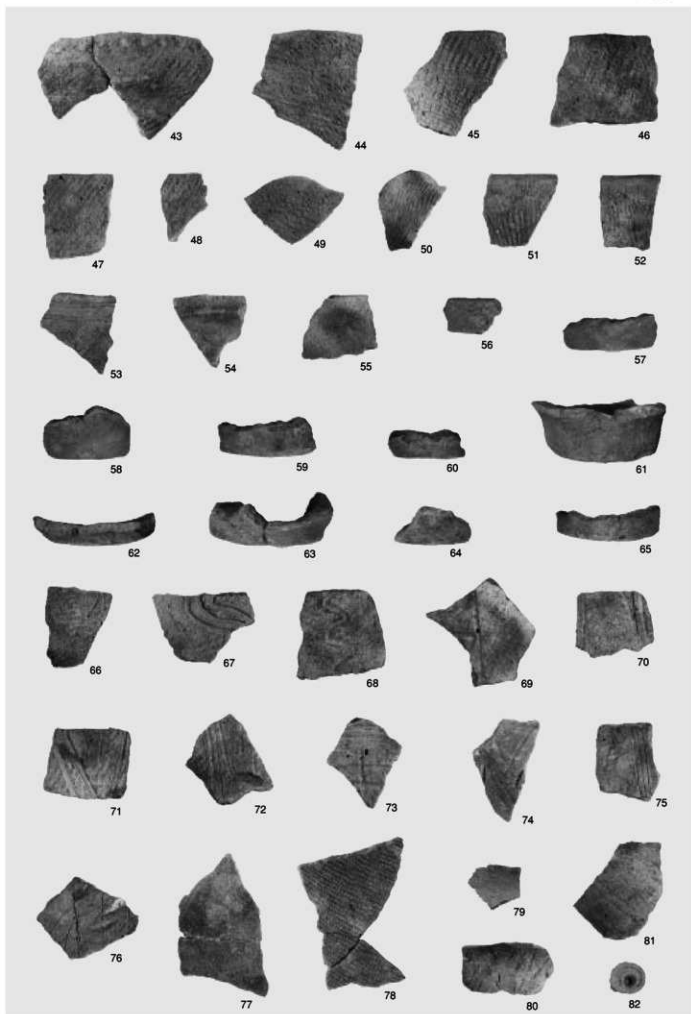


1

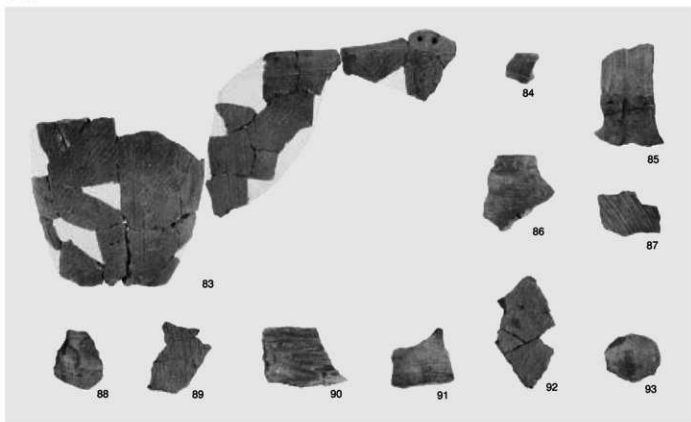
(1) 本郷台遺跡01D出土遺物



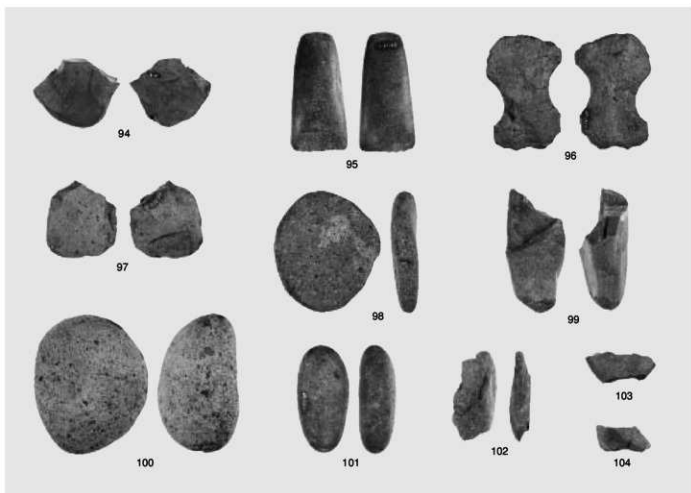
(2) 本郷台遺跡遺構外出土遺物(縄文土器) 1



(1) 本郷台遺跡遺構外出土遺物(縄文土器) 2



(1) 本郷台遺跡遺構外出土遺物(縄文土器) 3



(2) 本郷台遺跡遺構外出土遺物(石器)



(1) 本郷台遺跡遺構外出土遺物(須恵器・土師器)

報 告 書 抄 録

ふりがな	ちばけんやちよしたかつやかたあともちてん・ほんごうだいいせきはくつちようきほうこくしょ
書名	千葉県八千代市高津館跡b地点・本郷台遺跡発掘調査報告書
編著者名	武藤健一・伊藤弘一
編集機関	八千代市教育委員会
所在地	〒276-0045 千葉県八千代市大和田138-2 TEL.047-483-1151
発行年月日	西暦2004年(平成16年)3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	道路番号					
たかつ 高津館跡b地点	やちよしたかつあびなむら 八千代市高津字中村547-2地	12221	238	35度 42分 49秒	140度 5分 32秒	20010306～ 20010312	確認調査 上層 136m ² /1,207.72m ² 下層 6.4m ² /1,207.72m ²	宅地造成
ほんごうだい 本郷台遺跡	やちよしせうのはしあびさごて 八千代市桑橋字サゴテ670地	12221	65	35度 44分 57秒	140度 5分 3秒	20020307～ 20020326 20020701～ 20020808	確認調査 394m ² /5,100m ² 本調査 上層 200m ² 下層 6m ²	土砂採取 農業基盤整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
高津館跡b地点	竪館跡	中世	なし	なし	
本郷台遺跡	包蔵地	縄文時代	竪穴 4基 竪穴 1基 ピット 5基	縄文土器(早・前・中・後・晩期)、打製石斧、磨製石斧、燧石、磨石、礫器、石器	
	集落跡	奈良時代	竪穴住居跡 1軒	土師器、須恵器	

千葉県八千代市
高津館跡 b 地点・本郷台遺跡
発掘調査報告書

印刷日 2004年 3月26日

発行日 2004年 3月31日

発行 八千代市教育委員会

〒276-0045

千葉県八千代市大和田138-2

TEL 047-483-1151